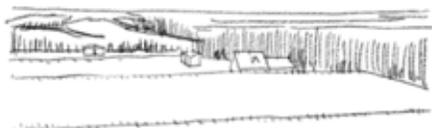


最初にこのことを「千五百坪の森に囲まれた（気分になる）暮らし」と書いたが、この土地を紹介してくれた隣家の友人が以前に撮った写真を見ると木が一本も生えていなかったことがわかる。ここは緩やかな斜面を造成して人工的につくられた土地だったのだ。一区画千から千五百坪で共同井戸から給水される計画的な分譲地だったことが伺える。

私の入手した土地の登記を見ると、昭和一九六六年八月に分筆され翌六二年六月に前住者が購入していることがわかる。おそらく、その頃に造成されたものであると思われる。今から五十五年前になる。私が森といっているのはその間に育ったものということだ。最初の冬の大雪で除雪を手伝ってくれたSさんは分譲当時のことを記憶しており、木といえば区画道路沿いにトドマツが植えられていたくらいだという。それと巨石。私の土地にも立派な石が四個も鎮座している。この石については最初は趣味的に馴染めなかったが、そのうち何かありがたいものに見えてきて、今では年のはじめに供え物をして拜んでいる。

さて、話を木のことに戻そう。区画道路沿いのトドマツ以外の木は先住者が植えたかというところ、そう思われるのは数本のオンコだけと見うけられた。結構な樹高で目立つのはハンノキとヤチダモで、あとはシラカバやクリそしてヤナギだ。いずれも庭園樹としては馴染みが無いもので、このあたりの丘陵の固有種に符合する。ヤチダモやヤナギが多いのは、ここが当初から水気の多い土地であったことが伺える。ハンノキやシラカバはパオイオニア樹種の代表格だそう。パオイオニア樹種は、栄養の乏しい土地でも真つ先に根を生やし、空中の窒素を地中に固定し次の世代の樹木が成育しやすい環境をつくってくれるのだそうだ。

クリはどうしてか。これは先ほどのSさんの話では、せつせと植林したのはエゾリスだとのこと。エゾリスは冬眠しないので雪に覆われた冬中どこかで食べ物を調達しなければならぬ。そのために、秋になるといろいろな木の実を集めては落ち葉の下などに埋めて冬に備えるのだそう。確かに地面をよく見ながら歩いていると、いろいろな木の実が落ちている。そしてその周辺には、その実をつける木が見当たらないことがある。これがエゾリスの植林なのか。だが、見つけるのは雪の融けた春先なので、どこに埋めたか忘れてしまったものかとも思う。彼らの忙しない行動と、どこかおバカそうに見える風貌がそう思わせるのかもしれない。隣家で自然に生えてきたクルミの小さな木をもらって、将来、私たちがいないかもしれないがエゾリスの食べ物になればと敷地の片隅に植えたことがある。植えて一ヶ月ほど経ったころその木の根元にクルミの実が落ちているのを見つけた。もちろん、その木のものではないのは明らかだが、エゾリスが将来の実りを楽しみにお供えをしたのではないかと真面目に考えてしまった。おバカに見えて実はしっかりとした将来設計を描く力があるのかも知れない。私が見ている木々は、造成で裸地となったこの土地に風や虫や動物たちの力を借りて長い時間をかけて根付いてきたものたちであるのだ。



山田 隆夫

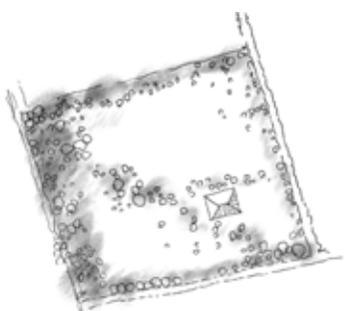
一旦裸地となったこの土地にどのように樹木が育ってきたのかを記録した
ものがあると面白いと思うのだが、そのようなものがあるはずがない。ただ、
過去の航空写真を探して見てみると興味深いことがわかった。一九六一年の航
空写真からは、この土地を含め周りは一面雑木林で、自然に恵まれた環境であっ
たことがわかる。それが十年後の一九七一年の航空写真では木が一本もない裸
地に変わってしまった。この時点では家は一軒も建っていない。その五年
後の一九七六年の航空写真では家らしき建物が六軒確認できる。都市計画法が
制定され市街化を抑制すべき区域として市街化調整区域の指定制度ができたの
が一九六八年で、それがこの土地に適用されるまで少し時間差があったと思わ
れるが、それもあつて駆け込みでつくられたのではないかと思われる。

その写真を拡大して見ると、木と思われる影が何本か確認できる。それから
また十年近く後の一九八五年の航空写真では木の影が列としてつながってき
ているのがわかる。その木の列は丁度四角い土地の北西から南東にかけて対角線
状に位置している。建物は四角い土地に平行に建っているので人工的に植えた
木としては配置が不自然である。どうして対角線に木が列をなして生えたのか。
その分野の専門的知識があるわけではないので、あくまで素人考えであるが、
次のようなことだったのではないか。

もともとの地形が土地の北東から南西に向けての傾斜地で、そこを平らに造
成するにあたって、北東の土地を削り南西に埋めたとすると、木の生えている
対角線は表土が比較的残っていたのではないか。裸地のなかでかろうじて育つ
のに適した土があるところに風や生き物の力をかりて偶然降り立つことができ
た種が、一生懸命根をおろした結果だとすると感慨深い。

今は、いろいろなところに木が生えて明確に対角線の木の列は認識できな
い。それから三十五年以上経つので土もできてきたのかもかもしれない。ただ、よ
く見ると同じ種類の木が小さな集落をつくっているように見える。大きな木の
まわりに同じ種類の小さな木が確認できる。ハンノキの集落、ヤナギの集落、
ヤチダモの集落、ミズナラの集落などなど。それがさほど広くない敷地に点在
するように広がり、その隙間を埋めるようにいろいろな種類の木が生えている
のだ。もっと知識があれば、それぞれの集落やその間を埋める木々が、なぜ、
そこに根をおろすことになったのか、水や土壌との関係で説明できるのかもし
れない。

釣り好きのTさんが竹山のこの土地の樹木を見たときに、「日頃、釣りで
くところで見える樹木とその種類とは違うな。」と話してくれた。ここは樹種が
多様で造林された山で見られるのとは違うということだ。多様性は、単にいろ
いろなものが混在している状態ではなさそう。多様性は、それぞれに適した
場があること。その場を選択できるかどうかは自己的に決定できるというより
他者の力や偶然の力が加わられる状態であることが大きい。そして、それらがあ
るグループをつくったとして、その間にさらに生きる隙間があるということか。



こうして見てくると、もうひとつ疑問に思うことがある。造成で裸地となったところが、三十五年以上の時間のなかでどのような状態になってしまったのかということだ。前に、側溝が土砂で埋まってしまつてミニ扇状地のような状態になり、いわゆる扇端に相当するところが湿地状態になったのではないかと書いたが、そもそも側溝に流れる水はどこからきているのか。

過去の地形図を探してみたところ一九五二年発行の二万五千分の一の地形図があった。まだここが市ではなく村だった頃で、市街地らしきものは見当たらない。つまり素の地形がわかる状態の地図だ。これによると私の住んでいる土地は南北に長い丘陵の頂部近くに位置するようだ。丘陵の頂部からは四方に沢のような筋が確認できる。私の土地がある造成地は、その沢のひとつを何段かに平らに整地してつくられたものようだ。

もうひとつわかつたことは、この南北に長い丘陵の端部には明治以降レンガを生産する工場が盛んにつくられ現在もレンガの産地として名の通つたところだということだ。私の土地も、家をつくる際におこなつた地質調査の結果を見ると三メートル程度の深さまで粘土層だつた。粘土は非常に細かな粒でできた土で、水も浸透しづらい性質がある。

そもそも水はけの良くない粘土が厚くある土地で沢状の地形であれば、雨が降ればそこを水が流れることになる。造成で平らにしてもおそらくその下に粘土層に支えられた水の道が残つていないのだろうか。そういえば、この周りの土地のいろいろなところに小さな池が見られるのだが、それらは水の道から僅かに流れてくる地表には現れない水を溜めたものかもしれない。そしてそれらの池から流れ出る水が側溝に集まり一年中枯れない流れとなっている。そう考えてみると、数万年の月日を経て堆積され、また風雨に削られてできたこの土地の性質は少々人間が造成しても変わらず今も生きているとも言える。そして、人の手が離れ側溝が埋まつたままになつたことによつて、行き場を失つた水がちよつとした傾斜を頼りに僅かな土砂と一緒に土地全体に流れ、常に水の溜まつた湿地のような状態になつていったのかもかもしれない。

造成直後に根をおろした木々も、水はけの悪い土地に適応するハンノキやヤチダモそれにいろいろな種類のヤナギが優勢になり、草花もアシやガマそれに苔のたぐいがあちこちにコロニーをつくつていったのだろうか。枯れた木や草も常に水がある状態では、土になることもできずいわゆる泥炭の状態で粘土層の上に堆積することになる。そうやつて半世紀の時間をかけて今の土地の状態になり、そこに私たちが偶然に出会うことになつた。

そう考えると、単に人が暮らす上で厄介な湿地に出会つてしまつたと言つてしまうのは憚られる。土地は人間の尺度を超えた大きな大きな時間の流れのなかで変わらぬ性質を保ちながら、時としてその形状を変え、その都度多様な動物を迎え入れ生きている。そのほんの一コマに私たちが加えさせていただいている。そう考えるのが自然のような気がしている。

